

私の挑戦 / ~ニッポンでの学びを胸に~

基本的なインフラが破壊されるなど厳しい環境での生活を強いられている人々。生まれ育った土地に一刻も早く平和が訪れるよう、日本で受けた研修での学びを生き、奮闘する人たちがいる。



イマード・ハイダルさん

FROM SYRIA シリア

カイゼンを復興の力に

2 011年から続く内戦により、多くの人が家や仕事を失ったシリア。第2の都市アレッポでも激しい戦闘が続いているが、それでもこの土地に残って奮闘する人がある。2010年に日本で研修を受けたイマード・ハイダルさんだ。

大学卒業後、毛織物を加工する会社を起業したハイダルさん。ビジネスの経験がない彼にとっては、まさにゼロからのスタート。地元起業家セミナーに参加しながら、必死に経営のノウハウを学んだ。そこで出会ったのが、セミナーを主催したアレッポ工業会議所に派遣中のJICAのシニア海外ボランティアたち。「何事にも真摯に向き合う彼らに出会って、日本に興味をわきました」。

念願がなかって参加した日本での研

修では、「町工場のものづくり」で有名な大阪の中小企業などを回り、日本の高度経済成長を支えたカイゼンの現場を視察した。そこで実感したのは、ビジネスのカギは「人」だということ。「一緒に仕事をするスタッフ、製品を買ってくれる顧客。すべての活動に関わる“人”を尊重するという基本に立ち返ることができました」。

自分の学びを一人でも多くの人に伝えたいと、帰国後は製造業の経営者などを対象にカイゼンセミナーを積極的に開催。アラビア語でテキストも作成した。度重なる爆撃により工場は破壊されてしまったが、それでもハイダルさんは「意志さえあれば、人生に終わりはない」と語る。逆境の中でもこの国の明日を信じて、前を向いて進んでいる。



帰国後はカイゼンのノウハウを伝えるためにセミナーを開いた



日本の研修で学んだ内容をまとめて、アラビア語でテキストを作成

ヤマーム・ファンシー毛織会社

ガザ地区の難民キャンプで幼少時代を過ごしたというオサマさん。祖父の代に土地を追われて難民となったが、「今は小さいけれど家を持ち、かけがえない家族と暮らすことができて幸せ」と話す。

そんな彼が勤務するのはエネルギー天然資源庁。電力の多くをイスラエルに依存し、停電もしょっちゅう起こるガザ地区では、パレスチナが“国家”として自立するためにも、自力でのエネルギー供給が喫緊の課題。そこで導入を検討していたのが、再生可能エネルギーだった。

「日本にはエネルギー開発の最先端の技術がある。その現場を実際に見て、何かヒントを得たいと思っています」。日本で研修を受けるために来日したのが2011年。約1カ月の

研修を通じて、日本ではどのように電力をつくっているのか、どのような制度があるのかなどを学んだ。そこで目にしたのが、自然の力を活用した太陽光発電だった。「ガザ地区は日照時間が長いので、まさに最適な方法ではないかと。日中に電力をためておけば、停電が起こっても、しばらく電気を使うことができます」。

現在は研修の学びを同僚たちと共有しながら、太陽光発電の導入に向けて奔走中。その第一歩として、日本の後押しを受けながら、ガザ地区最大の病院のICUユニットに太陽光パネルを設置中だ。「中東と平和のシンボルとして、ガザ地区にいつも光がともるようにしたい」。試行錯誤しながらも、その決意を新たにしている。



関西地方の企業などを回ってエネルギーについて学んだ



一緒に研修を受けた仲間たちと議論。「日本では“決して諦めない”姿勢も学んだ」

FROM PALESTINE パレスチナ

太陽光発電で人々に光を



ナジャール・オサマさん

パレスチナ自治政府エネルギー天然資源庁